

## 近況報告

歯学部歯学科 14 期 齋藤 功

新潟大学歯学部同窓会女性会員メーリングリストに登録されている女性の先生方こんにちは。歯科矯正学分野を担当している歯学部 14 期生の齋藤 功です。同窓会会員向けに原稿を書かせていただくのは、同窓会誌に執筆した教授就任のご挨拶以来です。今回は、同窓会女性会員支援部川原のぞみ先生からの依頼を受けて執筆することになりました。登録制で現在およそ 80 名の女性の先生方が登録されていると伺っています。果たして ML に登録済みの洗練された女性の皆様方に興味深い話題を提供できるか甚だ疑問ですが、川原先生は当分野の同門でするのでお断りするわけにもいかず・・・ということで近況を認めることにしました。

私が歯科矯正学分野教授を拝命し責任者として活動をはじめたのは 2004 年 10 月 1 日です。日本の国立大学が国立大学法人へと変革したのが同年 4 月 1 日ですので、丁度 6 か月後に分野の舵取りを始めたこととなります。当初は、従来の大学の管理システムの詳細についてさえわからなかったわけですが、さらに「法人化」という新たな制度になったことで分野運営はなかなか大変でした。しかし、分野同門会の先生方からのご支援とご協力を得てどうにかこうにか運営しつつ、顧みれば教授就任から 12 年 8 か月が経過しました。

矯正歯科治療はほとんどの場合、壊れたり、損なわれたりした形や機能を元に戻そうとする営みではなく新たな形や機能を創り出す医療であり、治療を提供するにあたっては治療経過や結果の予測、すなわち予後の把握が不可欠です。矯正歯科治療を完遂するには、動的に顎骨や歯のコントロール、経過観察、動的治療後の安定性の確認を含めると相当の時間が必要です。したがって、一人前の矯正歯科医になるには同様に相当量の時間を要することとなります。

当分野には毎年 3～4 名のいわゆる新人の先生方が入局してきます。毎年 7 月頃に入局希望者向けに説明会を実施していますが、上述した理由から研修には相当の期間が必要で、常に先を予測、考える力を養うことが必要なので必然的に研修は厳しくなると強調してきました。その厳しさを承知で入局してくる若手には、医局スタッフとともに知識と技術はもとより医療人としての倫理観を具備した一人前の矯正歯科医になってもらうべく、歯科矯正学・矯正臨床の厳しさと楽しさを存分に伝えることを心がけてきました。また、新しく入局してくる方々はすべて大学院に入学してもらうこととしています。毎日が応用の連続である矯正歯科治療は先を読む力の習得が欠かせませんが、過去の論文を渉猟して未解決の問題を探し出し、仮説を立て、研究計画を立案し、実験したりデータを処理して結果をまとめ考察するという大学院生としての一連の営みにも先見性が必要であり、この点において臨床での営みと極めて類似しています。さらに、得られた結果をもとに学会発表、論文作成を経験することは、矯正臨床を実践していく上での論理的思考回路の醸成に寄与するものと考えています。実際、大学退職後矯正歯科医として活躍している OB、OG の先生方から

は、医局在籍時基本的臨床トレーニングとともに、大学院生として培った研究遂行能力は矯正歯科医としてさらに向上するために欠かせないとの評をもらっています。こういった評価をいただけることは、分野を主宰する教員冥利に尽きると思っています。

教授となった2004年4月から今年3月までに大学院生として在籍し学位を取得した方は43名（一般入学34名、\*国費外国人留学生7名、社会人特別選抜2名）になりました。これだけ多くの先生方が博士（歯学）となったのはとても嬉しいことですが、研究実施にあたっては基礎系分野、臨床系他分野から様々な形で協力、支援をいただいています。今年度も大学院生3名（新潟大学卒2名とミャンマーからの国費外国人留学生\*1名）が入局し、大学院生総数は15名（国費外国人留学生2名を含む）で常勤在籍者の半数を占めています（写真1）。また、大学院生を含めた女性医局員の占める割合は年々上昇し、今年5月現在で女性11名、男性20名（歯科臨床研修医1名を含む）となっています。

一方、近代あるいは現代矯正学はおもに米国から導入され、米国での治療成果をもとに日本における矯正臨床の概念が構築され普及してきました。米国での治療結果や臨床研究はおもに白人を対象としたものですが、我々日本人とは顎態の特徴、顎骨の成長能力、成長様相が大きく異なります。端的に言えば、日本人に対する不正咬合の治療は白人に対するそれと比較し難易度が高いと考えています。かなり前ではありますが、米国（オハイオ州立大学）留学中所属講座の症例検討会に参加した折にも痛感したことです。こういった背景から、日本における治療成績や臨床研究は世界に向け積極的に発信すべきと考えてきました。それを実践する一つの形として、最近も欧米諸国のみならずアジア諸国で開催の国際矯正歯科学会において、分野における臨床や研究の成果を発表する機会をいただいています（写真2, 3）。今後もこういった機会を生かし、日本国内はもとより他国における矯正臨床の向上に少しでも貢献できるよう努めていく所存です。

以上、ご依頼の意図に反して？「堅めの内容」になったかと危惧しているところですが、母校歯科矯正学分野の近況を知っていただきつつ、歯科矯正学・矯正臨床の一端について思い起こしていただければ幸いです。女性会員メーリングリストに登録の先生方におかれましては、お体に気を付けてそれぞれのお立場でますますご活躍ください。

（2017年6月13日記）

（脚注）\*日本の国費（奨学金）を受領し留学する外国人のこと。文部科学省が管轄し文部科学大臣が選定する。事務手続きは各国大使館または日本国内の大学を通じて行う。

（写真の説明）

写真1：今年の誕生日に医局スタッフとともに

写真2：第22回マレーシア矯正歯科学会国際会議で招待講演後演者らとともに（2016年4月、ランカウイ島）

写真3：第117回米国矯正歯科学会（AAO）での招待講演（2017年4月、米国サンディエゴ国際会議場）



写真1：今年の誕生日に医局スタッフと



写真2：第22回マレーシア矯正歯科学会国際会議で招待講演後演者らとともに  
(2016年4月、ランカウイ島)



写真3：第117回米国矯正歯科学会での招待講演  
(2017年4月、米国サンディエゴ国際会議場)